
VRMMOに一億課金しましたが、なにか（キリ

shirou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRMMOに一億課金しましたが、なにか（キリ

【Nコード】

N6596W

【作者名】

shirou

【あらすじ】

最近話題のVRMMOエルガイア。そこにちよつと吹っ飛んだ感覚を持つ少女がいた。彼女の名前はスイ、某掲示板で「ネットゲ史上最強の廃課金プレイヤー」と呼ばれる存在である。だがそんな彼女はある日、隠し職業へ転職したことがきっかけで異世界に飛ばされてしまい……！？

とある魔神さま(改)(前書き)

流行に乗ってみました……。
後悔はしてないです。

とある魔神さま（改）

「なかなか……当たらないわね」

回転する箱の中から次々と飛び出してくる球。赤、黄、青、緑……。その色の数々に、私はフウッと大きなため息をついた。かれこれ何時間このくじを引き続けているのだろうか。ふと空を見上げてみると蒼かった空のエフェクトが、茜色に染まってきている。眩しい夕陽に少しうんざりしたように目を細めた私は、少々いら立ち気味に回転機のハンドルを回し始めた。この世界はVRMMOであるがゆえに手が痛くなることはないが、この単純作業はなかなか面倒だった。

VRMMOエルガイア。現在日本でかなり流行しているオンラインゲームの一つ。中世ファンタジー風の広大な世界観と無限にあるのではないかとさえ噂されるスキルや職業の組み合わせがネット上で話題になり、現在爆発的に人口が増加しつつあるタイトルだ。

このゲームはプレイヤーが守護騎士と呼ばれる存在になり、人を襲うモンスターを討伐したりしていくゲームである。ただしその楽しみ方は非常に多く、最強のプレイヤーを目指してひたすらモンスターを狩るのもよし、騎士団を立ち上げて仲間と楽しむのもよし。さらに商人などの非戦闘職に転職すれば、店の経営なども楽しむことができる。エルガイアは、まさにいろんな意味で混沌とした様相を呈しているゲームだった。

そんなエルガイアにいる約四万人ものプレイヤー。その中には当然廃人と呼ばれるような人間も数多くいる。一日十八時間ログインする猛者やらゲームのために会社を辞める猛者、最近ではゲームが原因で離婚したとかいう人間までいた。

私ことスイはそんな廃人の一人だった。加えて人に言わせると廃人たちの中でも最強厨などと呼ばれる人間に属しているのだそうだ。某百科事典によれば、最強厨とは病的なまでに強さを追い求めている人間のことなのだが……。私個人としてはそれほど最強を目指しているつもりはない。ただし、某掲示板によれば私は「ネットゲ史上最強の廃課金プレイヤーw」らしい。

彼らから言わせてみると、このゲームに存在する課金の宝くじを最もレアなアイテムが出るまで回すというのはおかしいようだ。宝くじは料金が一回三百円で、一番レア物のアイテムが出る確率がだいたい一万分の一。なので、当たるまで回すには約三百万円ほどしかかからないのだが……。それがどうにも理解しがたいらしい。

私の場合、十三歳で米国の大学を卒業してからの約二年で稼いだ天文学的な資産があった。おりしも当時はVR技術の開発によってIT関連の株式がバブルのように暴騰している時期であり、その波にうまく乗ったのだ。おかげ様で投資した両親の遺産は二年で数千倍にまで膨れ上がり、今では利回りや配当金だけで年間数十億もある。なので、ゲームに課金する程度の金額は「小銭」のうちだと私は思っているのだが……。彼らにはイマイチこの感覚がわかってもらえないようだ。

ただし、この莫大な資産が原因で私はやたらと注目を浴びているのも事実だった。毎日のように取材を申し込まれ、家に一日中記者

が張り付いているのなんて当たり前。いつそ解約しようかと思うほど、寄付を求める電話がかかってくるのも日常茶飯事。さらにもっとたちの悪いことに、暗殺されかけたことも何回かある……。

私がゲームに熱中しているのも、そんな現実につんざりしたからに他ならない。私の周りにいるのは、欲望に目がくらんだ人間だけ。誰も、私自身を見てくれることなどない。信じがたいことに、彼らにとって私の存在は私の資産の付属物にすぎないのだ。

そのような理由でやや現実逃避に走っている私。そんな私はエルガイアを思いつきり楽しんでいて、現在では三回目の転生までキャラを育て上げていた。もつとも、何故か人から奇異の視線で見られるのでパーティーを組んだことはあまりなかったが。

このエルガイアではレベル上限まで達したキャラを何度か転生させることができ、そのたびに初期ステータスにボーナスが与えられる。当然最強を目指す廃人たちはすでに何度も転生させており、私の三回というのはむしろ少ない方だ。

ちなみに、職業の方は三回転生しているが初級職の戦士のままである。エルガイアを運営している会社が「初級職から派生する隠し職業が好き」と某巨大掲示板で書かれていたのを信じたから。胡散臭い情報だとは自分でも思うが、とくに目的もない私には隠し職業になれるかもしれないというのは途方もなく魅力があった。

そして、そんなひたすらレベルを上げる日々の中で迎えた大型アップデート。その日、ゲームにログインした瞬間に私の頭の中に次のような情報が流れてきた。

「初級職から新職業への転職解禁！ 隠しクエスト、もしくは新・

アイテムくじ(一回千円)で『転職の書』を入手しよう！ ちなみに、一番最初に転職した方には信じられないような特典が！」

とある魔神さま(改)(後書き)

リアルにMMOで無双するにはこの方法しかないと思ったんだ……
宝くじの部分の表現が誤解を招きそうだったので微修正しました。

第一話 魔神さまと掲示板（前書き）

途中に2ちゃん風味の描写が入ります。

第一話 廃神さまと掲示板

運営からのメッセージが流れた直後。私はさっそく転職に関する情報を確保するべく、このゲームにある総合掲示板「エルガイアちやんねる」を開いてみることにした。右手を空中に差し出し、半透明のウィンドウを展開。すると、その無機質な電子画面にはすでに驚くほどたくさん書き込みがあった。

516 名無しの守護騎士さん 9/8 06:11
どうやら、隠しクエストはもうすでに発見されたようだなw

517 名無しの守護騎士さん 9/8 06:13
マジかw ソースプリーズ

518 名無しの守護騎士さん 9/8 06:14
ぬこ耳大隊と幻想殺し旅団のやつから聞いた
もうすでにギルマス以下有力なメンバーはクエに出発したらしい

519 名無しの守護騎士さん 9/8 06:14
さすが廃人wwww

520 名無しの守護騎士さん 9/8 06:15
なんとという行動の速さ。
サラマンダーより速ーい！

521 名無しの守護騎士さん 9/8 06:16
話題を豚切るけど、課金くじにチャレンジしたやつおる？
あれでも転職の書が出るっばいけど

522 名無しの守護騎士さん 9/8 06:17
<<521

ギルメン全員で合計一メガ課金したけど、まったく影も形も見えな
かったぜorz
他に手に入ったアイテムがかなり使えるから、損はしてないと思う
けどな

523 名無しの守護騎士さん 9/8 06:17
俺様のマナー力を見せるときが来たか。

へへ、すまんなしょぼいPSで。だけど、マナー力だけは一流だっ
てことを見せてやるぜw

当たったら報告してやるから、貧乏人は嫉妬汁www

524 名無しの守護騎士さん 9/8 06:18
<<523

カモ乙

というか、そのネタ古すぎるだろwww

525 名無しの守護騎士さん 9/8 06:18
<<523

スイ「その程度で一流とか……プッ」

526 名無しの守護騎士さん 9/8 06:19
スイたん来たw

あの娘、今回のガチャも当たるまで回すつもりかな

527 名無しの守護騎士さん 9 / 8 06 : 19
さすがにないだろw

528 名無しの守護騎士さん 9 / 8 06 : 20
<<527

スイたんをなめんな

俺はスイたんが転職一番乗りに1000ジンバブエドル賭ける

529 名無しの守護騎士さん 9 / 8 06 : 21

<<528

ちょッ、おまwww

でも、もしそうなたら他の廃人涙目w

530 名無しの守護騎士さん 9 / 8 06 : 22

運営にとっては神課金スイたん>>超えられない壁>>他の廃人だからな、そうなたてもしかたないだろ

ちなみにあの子は俺の嫁

531 名無しの守護騎士さん 9 / 8 06 : 23

おい、おまいらはいつになったら、スイたんは俺の嫁だつてことを理解するんだw

あの子は俺のものだぞ

.....「こつこつとき、どつこつ感情になればいいんだろっ?」

私にはいまいちよくわからない。とりあえず、私は最後の方の書き

込みをスルーするとウィンドウを閉じた。私が誰かの嫁とか書かれていたが、精神の健康のためにも気にしない方がいいだろう。世の中には変なことを考える大きなお友達がいっぱいいるってことはよくわかってるつもりだ。

某掲示板の人たち曰く「スルー検定一級」の実力を持つ私。ゆえに、すぐさま後半のレスの存在をきれいさっぱり忘れると、一目散に課金くじの設置されている王都へと向かうことにした。エルガイアちゃんねるの情報によると、まだ転職アイテムを入手した人はいないようである。ここは一番乗りするために、一刻も早くアイテムを確保するしかない。

私は空高く転移球を放り投げた。直後、球が爆裂して視界が白に歪む。渦巻く光、身体を包む浮遊感。何度経験してもなれないそれをしばらく我慢すると、私の視界に突如として大きな城が飛び込んできた。ホワイトパレス、エルガイア最大の国家であるレンブラント王国の王城だ。

その白鳥に喩えられる白亜の優美な王城は、盛装をしているようであった。中央に聳える高い尖塔から色とりどりの垂れ幕が下され、城壁の上では無数の旗がたなびいている。そのざわめきの中を火花が上がり、パーンと軽快な音を響かせていた。大型アップデートの直後というのはいつも、こういうお祭りのような状況だ。

当然、城だけでなく城下のにぎわいもすさまじいものだった。私の目の前には思わず引いてしまうほどの人の海が広がっている。どこもかしこも人、人、人……。夏休みの某ねずみ遊園地みたいだ。しかし、行かないわけにはいかない。私は大きく息を吸い込んで気合を入れると、その人波の中へとダイブした。

数分後。私は脱水機に放り込まれた洗濯物みたいにもみくちやに
されていた。だが、なんとか無事に課金くじの設置されている広場
までたどり着く。すでに広場の中央にあるイベント用の天幕は人で
いっぱい、その外ではレアアイテムを当てた者による自慢大会が
開かれている。私は某キツネ顔の小学生よろしくアイテムを見せび
らかしている連中を、あきれたように見送りながら天幕の中へと向
かった。

「いらっしやいませ！ こちらは新・アイテムくじの会場となつて
おります。一回千円ですが、何回おやりになりますか？」

「そうね、転職の書が当たるまで」

「……具体的な回数のご指定をお願いします。料金は前払いですので
一瞬だが、反応が遅れた受付のお姉さん。どうやらNPCではな
く運営の社員のようだ。私はそんな彼女の若干冷たい視線を完全黙
殺すると、課金くじを何回やれば転職の書が当たるのかを考え始め
た。

課金くじは、平均すると一万分の一くらいの確率で一番レアなも
のが当たる。だが、実際にはレアものが当たる確率はそのくじによ
ってまちまちだ。今回の場合、当たるものが恐ろしく貴重なものな
ので普段の五分の一で五万分の一くらいの確率を見込めばいいだろ
うか。そうすると、確実に当てようと考えたらその倍の十万回は
確保するべきだろう。

十万回やる。私はそう決断すると、お姉さんの方を向いた。そし
てその、よくできた石像みたいな状態の顔にちよつと尋ねてみる。

「料金の支払いって、ウェブマネー限定かしら？ 額が大きいから、銀行の口座から引き落とすようにしたいのだけど」

「……あ、はい！ できますよ」

お姉さんはおそらく課金用と思われるディスプレイを出した。私はそのディスプレイが海外の銀行にも対応していることを確認すると、お姉さんに告げる。

「なら十万回やるわ。料金の方はスイス銀行の口座からよろしく

」

第一話 魔神さまと掲示板（後書き）

……ゲームの料金を引き落としするのに、スイス銀行を指定したのはスイがはじめてかも。

第二話 魔神さまVS魔人さま？

クルクル、箱が回る。その中から、同時に何十個も飛び出してくる球。それはまるで、大当たりで出てくるパチンコの玉のようである。だが、その中に特等「転職の書」を意味する金色はない。くじを始めてかれこれ何時間になるうか。すでに日は沈み、王都は昼とは違うしつとりと落ちついた雰囲気に含まれている。もっとも、私の周りだけはどんと群がってくる野次馬のせいで熱気が増しつつあるけれど……。

「すげえ……どんだけ回してるんだ？」

「もう三時間くらいにはなるな」

「あれが噂のスイなのか？」

「ありえねえ……！」

ガヤガヤと騒ぐ野次馬たち。その暑苦しさで騒がしさは異常だ。彼らの容赦ない視線にちよつと恥ずかしくなってきた私は、早く転職の書を当てようとハンドルを回す速度を上げる。次々と、山ができそうなほどの勢いで球が飛び出していった。するとその時。

「あ………」

ピカリ、と何かが光った。私はすぐさまそれを手に取る。それは球だった。まごうことなき、美しい金の輝きを持つ球だった。

「……おめでとうございます！ 特等、転職の書です！」

ボウツトしている私に、お姉さんはどこか硬い笑みを浮かべて黒い本を差し出してきた。私はその手から、今にも破れるんじゃないかと思えるほど古びた本を受け取る。手に伝わる、紙とは思えぬほど確かな重み。以前持ったことのある金塊でも、これほどずっしりとしていただろうか。私は思わずホウ、と息をついた。こんなに興奮したのは何年ぶりか。たぶん、両親が死んで以来のことだろう。

私はしばし、うつとりとした表情で転職の書を眺めていた。どれだけ眺めていても飽きない、風格と趣のある書だ。だがそうして気分良く書を眺めていると、お姉さんが私の肩を少々遠慮がちに叩いた。

「あの、まだ約一千回分もくじが残ってるんですが……。回していただけますか？」

「そうね……」

私はスツと後ろに視線を走らせた。私の視界に、たくさんの野次馬たちの顔が飛び込んでくる。だれもかれもこちらを羨ましいようなあきれたような、微妙な顔をして見ていた。私はそんな彼らの表情を確認すると、お姉さんに告げる。

「残った分はここに居る人たちに一回ずつ引かせてあげて。もし、それでも余ったら運営への寄付ということだ」

「はい、わかりました。えーとみなさん、ただいまスイさんの御好意で課金くじが千回限定で無料になりました！ 一人一回ずつ引いてってくださいーい！」

手を挙げて、大きな声で宣言するお姉さん。私は彼女の脇からそくさとその場を立ち去ろうとする。だがしかし、そんな私の前に大きな試練が立ちはだかった。

「無料だと！」

「うおお、さすがスイたん！」

「すっげー！」

興奮した顔をして、次々と押し寄せてくる人々。その勢いたるや、前に一度だけ見たことがあるバーゲンセールにも匹敵するほどだ。戦士職といえども小柄な私は、すぐにその中へ飲み込まれていってしまう。人の圧力でもみくちやにされた私は、あっという間に波に揉まれるわかめのような状態になってしまった。

「すごかったの……」

数分後、ようやく人の荒波の中から脱出した私は大きく息をついた。くじを引いていた時間を含めると、かなりの時間が経過してしまっている。隠しクエストとやらの内容は良く知らないが、このゲームトップクラスの廃人たちなら攻略にはさほど時間はかからないだろう。急がなければ。

私はさっそく転職ができるタルーム神殿へ行くべく、転移球を放り投げた。宵闇に光が溢れ、ふわっとした感覚が私を襲う。風景が捻じれて、王城の代わりに壮麗な巨大神殿が姿を現した。私はとっさにあたりを見回して、私のほかに転職の書を所持している人間がいないかを確認する。すると。

「私が一番乗りするんだにゃー!!」

「何を、一番乗りはこの俺だ!!」

私の目の前を、ネコ耳少女と金びか鎧のオッサンが信じられない速さで通り過ぎて行った。まずい、ぬこ耳大隊と幻想殺し旅団のギルマスだ……！ おそらく一緒に隠しクエストに行った方がいいが、どちらが先に転職するのかわめてしまったのだろう。二人は激しく言い争いをしながら、暴走機関車みたいな勢いで神殿へと走っていく。私はその背中を見送ると、慌ててウィンドウを開いた。

「快速薬百個つと……」

一時的にスピードをアップさせる課金アイテムを百個選択。それと同時に私は姿勢を低くすると、クラウジングスタートの姿勢を取った。フウと深呼吸をして呼吸を整える。私はゆっくりと顔をあげて、視線の先に大神殿を捉えた。そして……。

「うおおッ!?!」

「な、何だにゃ!?!」

「失礼ッ」

銃弾のような加速。風になった私は一瞬にして二人を抜かした。すぐさま後ろから「チート反対にゃー!」だの「この廃人!」などという叫びが聞こえてくる。しかし私は気にしない。この世の中、勝ったものだけが官軍になれるのだ。某ガキ大将の理論は正しいのである。

そうして走っていくと、ものの数十秒で神殿に私はたどり着いた。その大理石でできた幅広の階段を上っていくと、夜にもかかわらず豪華な神官服をきた男が立っている。その見慣れた顔は転職で何度もお世話になる、大神官のものだ。どうやら、運営は今日中に転職希望者が来ることを見越していたようである。

「そなた、転職の書をもつものか？」

「ええ。はいどうぞ」

私はウィンドウから転職の書を出すと、大神官に差しだした。大神官はその表紙や中身を執拗に確認すると、大仰な動作で天を仰ぐ。そして再び私の方を見た彼は、良く響く威厳のある声で告げた。

「よろしい、さっそく転職の儀を執り行う」

第三話 魔神さまは戦乙女？

身振り手振りを交えながら、芝居がかった様子で転職の儀を宣言した大神官。彼は転職の書を広げると、指先から光を出して宙に魔法陣を描きだす。私もいまだ見たことがないほど複雑怪奇な文様が空に刻まれ、何やら神聖な空気があたりに満ちる。その様子にはVRとは思えぬほどの臨場感があった。かつてバチカンのサンピエトロ大聖堂を訪れたことがあるが、あの場所にもよく似た神々しい雰囲気だ。

「そなたは戦士の女。ゆえに書を用いて転職できるのは戦乙女だ。そなたは神に使える神聖な戦士となりて戦うことを誓うか？」

大神官の重厚な声が響く。同時に、私の前にディスプレイが表示された。そこには「特殊職『戦乙女』に転職しますか？ はい/いいえ」と表示されている。ちなみに、選択肢が二つしかないのは某大人気RPGより続く伝統である。日本人というものは様式美を尊ぶもので、VRMMOの時代になっても何故か重要な場面では必ず「はい/いいえ」の選択肢が登場するのだ。

私は迷うことなく「はい」を選択した。問われるまでもないことだ。大神官が手を高く掲げ、白い儀式杖を振る。宙に描かれた魔法陣から淡い光の粒が降り注ぎ、私の体の中を何か温かいものが駆け抜けた。

血と汗がにわかに沸騰。顔がカツと紅くなるのが、自分でも判った。体中に未知のエネルギーが満ち満ちていく。力が漲る、溢れる、迸るッ！

……それからしばらくして。ようやく私は落ち着いてきた。ずっと初級職を貫いていたので転職は未経験だったのだが、これほどのものとは想定外だ。まるで生まれ変わったように全身が軽く、力に満ちている。今なら手のひらから青白い光線でも出せそうな気さえした。

「すごい、これが転職……。全身から力が溢れてくるようだわ……」

「どうやら転職は上手くいったようだな。さっそく自身の力を確かめてみるがよい」

「ええ……」

私は大神官に促されるまま、ステータスを開いてみた。ポンと無機質な機械音とともに、半透明のディスプレイが目の前に現れる。するとそこには。

名前 スイ

職業 戦乙女（ベースレベル99）

HP	18000
MP	32000
攻撃	650
防御	720
敏捷	700
魔力	340
知性	230
命中	580
幸運	470

装備

頭 輪廻龍の髪飾り+10
胸 熾天使の聖装+10
腕 神撃の手袋+10
靴 天翔の靴+10
盾 螺旋盾イージス+10
武器 滅却剣アポカリプス+10
アクセサリ 月水晶のネックレス+10

転職前と比べて、すべてのステータスが五割ほど上昇していた。いままで見つかったいた最上位職では、伸びのいい能力が初級職と比べて三割ほど上昇する程度である。すべてのステータスが軒並み五割も上昇するなど、驚異的としか言いようがない。私はこの隠し職の圧倒的な力に思わず興奮して、息を荒くした。まったく素晴らしい気分だ。

そうして興奮している私に、大神官が近づいてきた。私は彼が近づいてきたことに気がつく、慌ててそちらへと向き直る。私は彼に、お礼の意味も込めて深々と頭を下げた。すると彼はニッコリと柔らかな笑みを浮かべながら、ゆっくりと口を開く。

「うむ、喜んでおるようだなによりだ。転職を司る者として嬉しいぞ。……して、特殊職へ転職したそなたへ早速わしから頼みごとがあるのだが、聞いてはもらえぬか？ なにぶん危険な頼みごとでな、特殊職に就いておる者でなければ手に負えそうにないのだ」

「依頼……？ 話次第では引き受けさせてもらおう」

これが特典か？ 私はとっさに思った。大神官というNPCは極

めて重要な役職にありながらも、今までクエストに絡んでくることがほとんどなかった。そんなNPCが初めて出す依頼だ、おそらく高難易度であるのが報酬はきつと素晴らしい。このクエストに参加する権利こそが、たぶん初めての転職者に与えられる特典なのだろう。

とりあえず話を聞くといった私に、大神官はふむふむといった様子でうなずいた。彼は表情を若干こわばらせると、真剣な面持ちで話を始める。

「実は、この神殿の地下にある異空間には強力な魔神が封じられておる。だが、最近になってその封印にほころびが生じてきてな。そなたにはこの異空間へと赴き、再び封印を施してほしいのだ。もし魔神が解き放たれるようなことになれば、この世はおしまいだからのう」

私の目の前に「魔神封印依頼を引き受けますか？ はい/いいえ」と表示されたディスプレイが現れた。選択肢などない。当然のように私は「はい」を選ぶ。すると大神官は私に深く頭を下げ、なにやら呪文を唱え始めた。

「ラ・フレイースト・ログル・ラーキスタ……」

朗々とした呪文が空を揺らす。私にその意味はわからないが、それはどこか嫌なものを感じさせた。にわかには飛び散る火花が大気を焦げ付かせ、おそらく魔力からなる圧迫感が私を包む。VRはここまで進歩していただろうか？ それは私にそんな疑問を抱かせるほど、リアルな感覚だった。

大神官の姿が不意に歪み始めた。ゆらり、ゆらり。さながら塵気

楼のごとく彼の姿が揺れる。歪んでは戻り、戻っては歪み。その繰り返し。やがて彼の体は風景に溶けて消え、代わりに何やら恐ろしげな「穴」が現れた。そこだけ景色をくり抜いたかのような、真黒な穴だ。

『それは異空間に通じる穴だ。それを維持できる時間は少ない。さあ、早くはいるのだ』

「は、はい……」

私はためらいがちに穴へと向かい始めた。近づけば近づくほど、恐怖をあおるような穴だ。一度はいれば戻ってこられないような気配が、ひしひしと私に伝わってくる。まるでブラックホールだ。

一步一步確実に。私は怖いと思いつつもその穴へと向かっていった。するとその時、頭の中に奇妙な声が響いた。

『どっか……こちらへ……戦………よ』

穴から不意に放たれた、雷のような光。同時に吹き荒れる強烈な風。それは掃除機よろしく、私を穴の方へと引きずりこんだ！

「うわあああッ………！」

私にしては珍しいくらい甲高い悲鳴。それとともに、私の体はいずこともしれぬ穴の向こうへと吸い込まれていったのだ……。

第三話 魔神さまは戦乙女？（後書き）

表現などを少しづつですが改訂しました。

第四話 魔神さまと謎の町

キラキラと眩しい陽光。目がチカチカとした。私がそれにたまらず身体を起こすと、そこは見知らぬ場所。青々と生命力に溢れた木々が生い茂り、小鳥のさえずりがどこかから聞こえてくる。どうやらここは、平穏な森のようだ。

私はそんな森の中にある、奇妙な魔法陣らしきもの上に寝かされていた。石畳にびっしりと出来そこないの平仮名のような文字が刻まれ、その周りを巨石が囲っている。鳥居のように組み合わせられた石が円形を形作るそのさまは、イギリスのストーンヘンジのようだった。

「ここが異空間？ 想像してたより平和そうな場所ね」

異空間と聞いておどろおどろしい地獄のような場所を想像していた私。だが存外に、異空間というのは過ごしやすそうな場所である。吹き抜ける風が、なんとも心地よかった。この様子なら、まだ魔神とやらは復活しないのだろう。……まあ、こういうイベントでは大抵の場合、何故か復活してしまうのだが。

とりあえず、私は森を抜けてみることにした。まずは移動しないことには始まらない。私は石の上で寝たせいでわずかに痛む背中を押さえながら立ち上がると、剣を片手に森へと繰り出す。腐葉土のやわらかな地面を踏みしめながら、私は森の中を歩いて行った。

そうしてしばらくの間森を歩いていると、私の耳にかすかに人の声らしきものが聞こえた。誰だろうか？ 疑問に思った私は、足音を消しながらそちらへと駆け抜けていく。するとそこには、危機感

が全くなさそうなふわふわとした少女がいた。危険なはずの場所なのに、彼女は鎧どころかいかにも普段着のような格好をしている。あまりにも無防備。もしかして、彼女は人型の超強力な魔物だったりするのだろうか？

「……こんにちは」

「ふえ、こんにちはです。……あの、あなたは一体誰なんですか？」

恐る恐る話しかけた私に、少女は緑の髪を揺らして少しおどおどしながら答えた。どうやら、人型の魔物とかではないようだ。私は少し安心すると、彼女にどうしてこんなところにいるのか事情を尋ねてみる。

「私は大神官さまに魔神の封印を依頼された守護騎士よ。あなたも守護騎士なの？」

「いいえ、私が騎士さまなんてとんでもないですッ！ 私はただ単に薬草を採りに来てるだけの薬屋ですッ！」

どこで習ったのか知らないが、ビシツと自衛隊式の敬礼を決めた少女。私はそんな彼女にちょっとあきれ顔になった。

「ただの薬屋さんがこんなところに来られるわけないわ……。あなた、ふざけているの？」

「滅相もないですよ！ 騎士さま相手にふざけるわけありません」

少女は手にした袋を必死にアピールし始めた。その中には、なにやら薬草っぽいものが大量に入っている。本当に、彼女はただの薬屋

のようだ。だがそうすると、ただの薬屋の彼女がどうしてこんなところにいるのだろうか？ もしかして、どんな病気でも治せると噂の魔界薬師さんなのだろうか？

「……あなた、魔界薬師さん？」

「私はそんな物騒な薬師さんじゃないです！ ただの町の薬屋さんですよ。今日はたまたま薬草が切れたので町から薬草を採りに来ただけです」

「町？ この近くに町があるの？」

「はい、すぐ近くにあるじゃないですか」

少女はそういうと、とととと走り始めた。私も急いでその後を追う。すると数分もしないうちに、大きな町が見えてきた。石造りの二階建てほどの建物がずらりと立ち並んでいて、その間を通りが広がっている。町の中心には大きな聖堂のようなものが立っていて、その尖塔に掲げられた巨大な鐘が見て取れた。

はて？ 私はその聖堂に見覚えがあった。屋根の円形アーチに、いかめしい稜線を描く古い外壁。そのすべてに確かに見覚えがある。だが、こんな町に来たことはないはずだ。一体、どこで見たのだろうか……。私は首をかしげると、記憶をまさぐってみる。考え込み始めた私の足がスツと止まった。すると固まった私に、少女が不思議そうに話しかけてきた。

「あの、どうかなされましたか？」

「この町に来たことがないのに、あの聖堂には何故か見覚えがある

なあと思つて」

「ラクーナ聖堂は有名ですから。絵葉書とかで見たんじゃないでしょうか？」

「ラクーナ聖堂？ この聖堂は大陸の南端にある、あのラクーナ聖堂なの？」

「ええ、そうですけど……」

ありえない……！ エルガイアの設定上、それはあり得ないはずだった。

エルガイアの設定。それはおおまかな流れから行けばオーソドックスな中世ファンタジー物である。大陸の覇権を狙っていた魔王が討伐されて約百年の時が過ぎ、再び世界に不穏な気配が漂い始めた時代。そんな時代に魔物から人々を守る守護騎士になったプレイヤーたちが、世界の謎を解き明かしたり魔物を討伐したりしながらいろいろと生活をしていくというのが大体の設定である。もつとも、自由度の高いMMOなので他にもいくらでも楽しみ方があるが。

その設定によればラクーナ聖堂というのは、世界を侵略しようとした魔王が最初に征服した地である。廃人の間では超高レベルの狩り場として有名で、アンデッドモンスターの総本山だ。聖堂やその周囲に広がる町全体が巨大ダンジョンと化していて、あちこちからゾンビが飛び出してくる場所である。私も何度か訪れたことがあるが、奇声を上げながら突撃してきたゾンビたちの姿は今でも忘れられない。それがなぜ……。

まさか、と思つた私はとっさに少女の方を向いた。そして彼女に

あることを尋ねてみる。

「ねえ、今年はガイア一〇〇七年で……間違いないわよね？」

「何を言ってるんですか？ 今年はガイア九〇一年じゃないですか」

第四話 廃神さまと謎の町（後書き）

ゲームの稼働期間などを考慮に入れ忘れたため、スイのセリフの
ガイアー〇〇四年をガイアー〇〇七年に修正。

第五話 魔神さまは考える

「あの、どうかなされたんですか？」

目を見開き、固まっている私。頭が真っ白になって、何も思い浮かばない。魂が幽体離脱でもしたようだ。そんな真っ白に燃え尽きている私に、少女の青い瞳が心配そうに向けられた。ぶつかり合う視線、はっとした。私はとっさに口を押さえると、フツツと笑ってごまかす。すると少女ははっとしたように肩をなでおろした。

「変なことをおっしゃるので心配しましたよ。大丈夫ならいいのですが……」

「心配してくれてありがとう。でも、ここは一体……」

もう一度、あたりの景色を良く確認してみる。だが目に飛び込んできるのは、エルガイアには良くあるファンタジー風の町。どう見ても、異空間などではないだろう。

まさかね……。私はとっさに以前読んだ小説の内容を思い出した。主人公がVRMMOに良く似た世界に取り込まれてしまい、現実への帰還を試みるという内容だ。読んだときはまるっきり非科学的だと馬鹿にしたが……現状を考えるとあながち無視できない。とりあえず私は少女に気付かれないようにウィンドウを出し、GMに連絡を取ることにした。

ウィンドウ自体は問題なく展開できた。私はゆっくりとその端っこにあるGMボタンを押す。すると、ほどなくしてウィンドウが切り替わった。しかしそこには『通信が切断されています』と表示さ

れていた。

「もしかして……トリップ？ いや、でもVRの原理的にそれはあり得ないはず……。だけどこの不可解な状況は……」

私はぶつぶつとつぶやきながら、しばらく考え込み始めた。不可解な現状、そこから導き出される最悪の想定。それを解決するための脳内シミュレーション。その流れが無数に繰り返され、だんだんと行動の選択肢が絞られていく。やがて導き出された解。最適解ではないかもしれないが、私はとりあえずそれに従って行動することにした。

私はなにやら心配そうに私の方を見ていた少女の方を見た。そして私はできるだけ曇った表情をしながら、少女に告げた。

「……困ったことに、転移球が暴走したのか行きかかった場所とは全然違う場所についてしまったみたいだわ。しかも暴走のせいなのかはわからないけれど、頭がぼんやりとして記憶に混乱が生じているの。守護騎士として依頼を受けていて、危険な場所へ行く予定だったということだけは覚えているのだけど……。それ以外のことははっきりと思いつけない」

「それは……困りましたね」

少女はうなずくと、顎に手を当てて何やら唸り始めた。どうやら彼女は私の想像していた以上に人がいいらしい。そんな善良な彼女を利用するのははばかられるが、緊急事態なのでここは仕方がないだろう。私は心を鬼にした。

私はウィンドウから彼女にばれないように金貨を一枚取り出すと、

それを指先でグニャグニャと曲げた。戦乙女の力で曲げられた純金の金貨は、またたく間に歪な金塊になる。パツと見て元が金貨だとわからなくなつたそれを、私は下を向いて考え込んでいる少女の手に握らせた。

「あの、これは？」

「……言いにくいんだけど、しばらくあなたの家に御厄介になれな
いかしら？ 記憶がまともでない私が宿屋に泊るのはどうにも不安
で……。できれば、できるだけ信用できそうな人のもとに居たいの。
今までの様子を見る限り、あなたならたぶん信用できるわ」

「そういうことでしたら構いませんが……。これを、受け取ってしまつてもいいんでしょうか？」

「構わないわ、お金なら幸いそれなりにあるから」

私がつこりと笑いかけると、少女は困惑したような顔をしながらも金塊を受け取つた。計画通りだ。人というのは、善意で貰つたものはなかなかつき返せないものである。価値のあるものならなおさらだ。今回はそれを上手く利用させてもらった。私は少女に悪いなど思いながらも、もう一度少女の方を見る。

「えっと、私の名前はスイ。これからお世話になるわ。あなたの名前は？」

「リーナです。騎士さま、これからよろしく願ひします」

「私のことはスイさんでいいわ。騎士さまなんて言われると照れく
さい」

「わかりました。スイさん、よろしくお願いしますね」

「ええ、よろしくね」

リーナが私に手を差し出し出てきた。私はそれを固く握りしめる。こうして私は、とりあえずの生活基盤を確保したのであった。

その夜、私はリーナの家に行った。リーナの家は薬屋といっても店頭販売をしているのではなく、道具屋などに薬を卸している問屋だった。ただし小規模なせいであまり儲かっているわけではないらしい。そのため家も小さめであった。しかし彼女は一人暮らしをしているため部屋は余っていて、私は部屋を一つ借りることができた。窓際に面した、とても質素で落ちついた部屋だ。私は鎧を脱ぐとさつそくその部屋のベッドに横たわり、月を眺めながら漫然と今後のことを考える。

私が今後生きていく上で最大の問題になってくるのは、やはり数年後に襲来する魔王だろう。やつが侵攻してくれば、間違いなく私の生活を脅かす。ゲームの所持金やアイテムがあるのでとりあえず生活費などの心配はないが、魔王がいることにはおちおち寝てもいられない。歴史通りなら勇者がそのうち倒してくれるのだろうが、必ずしも歴史通りになるとは限らない。

しかし、どうしたものか。エルガイアで以前、魔王復活イベントがあったのだがその時のスペックから考えるに絶対に私一人では勝

てない。不完全な状態で復活したという設定だったにもかかわらず、イベントに登場した魔王は廃人騎士団が連合を組んでギリギリ倒せるぐらいのスペックだったのだ。隠し職に転職したとはいえ、単騎突破は無理だろう。能力の極めて高いクラン、エルガイアで言うところの騎士団を結成する必要がある。

だが困ったことに、守護騎士を統合する組織である「ギルド」は魔王来襲をきっかけに設立されたという設定だ。つまり、まだギルドはこの世に存在しない。なので騎士団を設立するには自力で各地にいる守護騎士たちを集めてくるしかないのだが……。ただ単に守護騎士だけを集めたのでは絶対に周囲から怪しまれる。目的不明の戦力など、国や周囲の人間からしてみれば怪しすぎだ。何か戦力を集める理由が必要である。

個人が戦力を集める理由……。何があるだろうか。弱ったことに魔王来襲以前のエルガイアはとても平和な設定なので、魔物に備えてなどの理由は使えない。山賊などに備えて……。というのも駄目だろう。賊に備えるために個人がわざわざ騎士団を設立するなど、明らかに過剰だ。どう考えても怪しまれる。

なかなか考えがまとまらない私は、枕に頭をうずめながら考え込み始めた。しかしその時、はたと気づく。個人で戦力を集めようとするから駄目なのだ。ようは騎士団の隠れ蓑としてペーパーカンパニー、この世界の場合は何かの商会でも設立すればいいのだと。

第六話 魔神さまは元錬金術師？

翌朝。私が二階にある自分の部屋から下りてくると、すでにリーナが朝食の準備をしていた。台所から、肉の脂の焦げるなんとも香ばしい香りがしてくる。私はそれに吸い寄せられるように、台所の方へと歩いて行った。熱いフライパンの上で、ベーコンと卵が踊っている。シュワッと響く音と、はぜる脂。これはなんともおいしそうだ。

「あッ、おはようございます」

「おはよう。おいしそうね」

「えへへッ、いつもはベーコンなんて入れないんですけど今日は奮発して入れちゃいました」

「別に気を使わなくてもいいのに」

「いえいえ、そんなことないですよ。スイさんって、さぞや名のある守護騎士さんなんでしょう？ そんな人に変な料理は出せませんって」

「別にそんなのじゃないわ。今は記憶だつてまともじゃないのだし…」

私は若干複雑な顔をした。居候の身なのだ、あまりリーナに世話を焼かせるのは良くないだろう。だが、そんなことお構いなしに彼女は食事の準備を進めていく。小さなテーブルに次々と皿が並べられ、おいしそうな湯気があたりに漂い始めた。たまらず悲鳴を上げ

る私のお腹。仕方ない、とばかりに私はすごすごと席に着いた。

「冷めないうちに早く食べましょう。いただきます」

「なら私もお言葉に甘えて、いただきます」

まずは目の前で湯気を立てているコーンスープを一口飲む。ん？予想外においしい……！ 芳しいコーンの甘い香りと、口いっぱい広がる豊かな味わい。甘く、それでいてくどくはなく。ほのかに苦みのある岩塩と思しき味が全体を引き締めていて、すべての味のバランスが絶妙に保たれている。淡い水彩画のような、美しく繊細な味わいがそこにはあった。

私はスプーンを置くと、他の料理にも手を出した。するとどれもこれも、とてもおいしい。材料こそありふれているが、味は以前滞在していたウオルドルフ・アストリアのビュッフェを思い出させるほどだ。私はしばし、無言になって食事に舌鼓を打つ。

そうして食事に夢中になった私は、すぐに朝食を食べ終えた。いくつも並べられていた皿が、すべてきれいさっぱり空になっている。リーナはそれを見て嬉しそうな顔を見ると、私の方を見た。

「お口に合いました？」

「ええ、とっても。あなた、料理の才能があるわね」

「そんなことはないですよ。ただ、料理が趣味なだけです。……ところで、スイさんはこれからどうするんですか？ この町でも守護騎士のお仕事をするつもりなんですか？」

「そうね……。私自身は新たに商売でも始めようかと思っているわ。守護騎士なんていっても実体はただの自由業だから、仕事は不安定なもの。元手もあるから、この機会に何か新しい事業でもやってみるつもりよ」

「それはちよつと……」

リーナの顔が曇った。彼女は視線を下に向けると、なにやらぶつぶつと呟き始める。一体、何がどうしたというのだろう。私は彼女の方へ顔を寄せると、小声で尋ねてみた。

「何か、まずいことでもあるの？」

「うーん、部外者の人にはあんまり話してはいけないんですけど……。いま、この街の商業ギルドがちよつとゴタゴタしてるんです。だからいまギルドに申請を出しても、出店許可がおりないかと」

「ギルドの出店許可は必ず必要なものなの？」

「はい。法では定められていませんが、商業ギルドに許可を取らずに店を出すのは不可能ですよ。そんなことをやったらギルドに全力で潰されちゃいます」

極めてまずい状況だ。今の私には資金などはあっても、商売上のつながりなどが致命的に欠けている。そんな中で既存の大勢力と事を構えるのは不可能だ。まったく、どうしたものか……。

「……何か、いい方法はないのかしら？」

「既存のお店からの暖簾分け、という形で店を出すのならあるいは

……」

「それなら、すごく図々しくて申し訳ないのだけど……」

「言わなくてもわかります。私のお店から暖簾分け、という形でお店を出したいってことですよね？ でもさすがにそれはちょっと……」

頭を抱えて考え込み始めるリーナ。その口からはウンウンと唸り声が漏れる。さすがにお人よしの彼女でも、そこはためらうらしい。だが、私としてはなんとかそこを認めてもらわないと困る。

「そこをなんとか……お願いできないかしら？」

「むむ……。そうですね……」

「もちろん、あなたのお店の迷惑にはならないようにするし、相応のお礼もさせてもらうわ」

「うっーん……」

まだまだ悩むリーナ。彼女はいつそ悩ましいほどの唸り声を上げると、それきり静かになった。顎に手を当てて、深く肩を落とす。その目は普段のやわらかい印象とは異なる険しさがあつた。私はそれを、食い入るように見つめる。やがて

「……わかりました。ただし、条件があります」

「どんな条件かしら？」

「今月から、スイさんをこの店のブレインとして雇用します。もしそれで店の売り上げが大幅に上がったら、暖簾分けしてあげますよ」

「大幅ってどれくらいのパーセンテージかしら？」

「そうですねえ……。できれば来月の純利益で十五パーセント増を目標にしましょうか」

「十五ね……」

私はそういつと視線を巡らせた。部屋の扉の隙間から、店の様子が見える。僅かだが埃をかぶった棚と、その中に押し込められている商品の数々が視界に飛び込んできた。パツと見る限りではそれなりに掃除は行き届いているものの、商品の整理はイマイチ。おそらく必要なものは勘で捜している領域だ。

さらに、視線を巡らせると私のいる部屋の端に肖像画が見えた。その下には、何やらいろいろな文言が箇条書きで書かれている。おそらく肖像画はこの店の創業者のもので、箇条書きの文言は家訓か何かだろうか。

在庫整理ができてない店内に、創業者の家訓。世話になっているリーナには悪いが、業績の上がらない会社や店の典型例だと私は思った。

まず、在庫整理ができていないのは駄目だ。整理ができてないといちいち探すのに手間がかかる上に、デッドストックの増加にもつながる。コスト的には、在庫は少なければ少ないほどいいのだ。ただし、在庫がないとリスク管理の面で大きな弱点を抱えることになるので、全くないというのは困りものである。昔の震災で、某自動

車会社の工場がしばらく止まったみたいになりにかねない。

次に、創業者の家訓。これはある程度は尊重するべきなのだろうが、それも行きすぎると危険だ。同族経営の会社は、家訓などがあるとそれを守るあまり保守的になりすぎる嫌いがある。おそらく、この店もそんな感じであろう。リーナは性格的にそういうことには忠実そうだ。

それだけのことを考えると、私はフウと息をついた。そしてゆっくりとリーナに告げる。

「ぎつと見た限り、この店の状況だと……。二十五、いえ三十パーセントは利益を増加させられるわね」

「そ、そんなことできるんですか？」

「大丈夫よ。私はこれでもウォール街の錬金術師と呼ばれたこともあるんだから」

第七話 魔神さまとアイテム(前書き)

今回は日常編、という奴でしょうか。

第七話 魔神さまとアイテム

朝食を食べ終えた私とリーナは早速、店へとやってきていた。若干薄暗く古びた店内にはわずかだが埃が積り、瓶詰の薬があちらこちらに置かれている。しかも壁際に置かれた棚はすべていっぱい、今にも中身がこぼれて来そうなほど。どうみても、片付けができていない。

「まずは、お店の片付けから始めるわよ」

「ふええ、今日はお休みなのですよ。明日にしましょう」

「明日やるって言って、明日行動した人を私は見たことがないの。今日のうちにやっておくわよ」

「うつつ……。今日はゆっくりしたかったです……」

しびしびといった様子で動き始めるリーナ。料理は好きでも、片付けは苦手なようだ。彼女はそこら中に置かれている瓶を適当に抱えると、棚の方へと持っていった。そのままそれを、無理やりに棚へ押し込もうとする。

「ああ、待って。そんな適当にやったら駄目なの。同じ薬同士でちゃんとまとめて、使いやすいように配置しないと。私も手伝うからゆっくりやりましょう」

「はい」

二人で一緒に片付けを始めた私とリーナ。まず手始めに、店中の

商品をすべて床に並べて種類ごとに分類しようとする。だが棚やテーブルの上に置かれていた瓶は予想以上に数が多く、種類もやたらたくさんあった。私は思わず、ふてくされたように黙々と作業を続けているリーナの方を向く。

「ねえ、この店の商品って何種類ぐらいあるの？」

「そうですね、私も正確には覚えてませんが……。三百種類ぐらいいはありますよ」

「三百種類！？ そんなに薬系のアイテムがあるの？」

「ええ、品揃えの多さがうちの自慢ですから」

私はずらつと床に並べられた瓶を見た。無数の瓶が、草原の草のように床一面に並んでいる。確かにそれは数千本単位でありそうだった。だが、ゲームで登場した薬系のアイテムはせいぜい三十種類。一体どうして、これほどの数があるのだろうか？ 疑問に思った私はリーナに聞いてみる。

「……もしかして、風邪薬とかもあつたりするのかしら？」

「もちろんありますよ。風邪薬は五種類ぐらいいありますね」

「じゃあ、回復ポーションは何種類ぐらいいあるの？」

「回復ポーションはこれ一種類だけですけど」

リーナは並んでいる瓶の中から、青いフラスコのような瓶を取り出した。その中には蛍光グリーンの液体が入っている。エルガイア

のプレイヤーなら誰もが知っている回復ポーションだ。しかし、私はそれを見ると怪訝な顔をした。

「あら、風邪薬は五種類もあるのに回復ポーションは一種類だけなの？」

「はい、このポーションが一番よく効きますからね。というよりも飲んだらすぐに傷が回復するのはこの薬だけですから」

どうやら、この世界の薬はゲームのものと現実のものが入り混じっているらしい。なんともはや、奇妙なことだ。もともと「世の中におかしなことは希によくある」と某有名プレイヤーさんも語っているのだけれど……。何故かイマイチ納得のいかない私はふうむとばかりに、大きく息をついた。

そうすると私はあることに気がついた。スツと視線を走らせると、リーナの方を確認する。よし、リーナは瓶の片付けに夢中で周りに意識がいついていない。私はウィンドウをこっそり展開すると、中から快速薬を一つ取り出した。

「ねえリーナ。この薬もこの店で売ってる？」

「この薬ですか？ どれどれ、ちょっと見せてください」

リーナは私の手から快速薬を受け取ると、まじまじとそれを眺めた。彼女は懐から分厚い虫眼鏡を取り出すと、中に入っている赤っぽい液体を執拗なまで見ると、そうしてしばらくすると、彼女は驚いたような顔をしてこちらを見つめてきた。

「初めて見る薬です！ これ、どんな薬なんですか？」

「快速薬よ。飲んだら早く走れるようになるの」

「すごいです、そんなタイプの薬は初めてですよ！　どこで手に入れたんですか！」

リーナはキラキラと目を輝かせながら私の方へと迫ってきた。危険な目だ、マッドサイエンティストとかああいう感じがする……！　リーナからただならぬ気配を感じた私は、しっかりと瓶を持ち直した。そして、なんとか笑みを浮かべると彼女の方を向く。

「お、覚えてないのよ。気が付いたら持ってたって感じてね。効果とかはなんとなく覚えてただけなの」

「そうなんですか……。どこで手に入れたのかわかれば良かったのに……」

リーナはしょんぼりしたように肩を落とした。エメラルドグリーンのツインテールが力なく揺れる。彼女の様子を見て、私はなんだか悪いことをしたなと思った。が、その一方で私はほっと息をついた。まさかゲームの課金アイテムですなどと言えるはずがないのだから。

それから、店の片づけはさくさくと順調に進んだ。そして夕方頃には店にあったほとんどすべての瓶が整然と並べられ、残りの期限切れなど不要な薬の瓶もゴミ箱へと処理された。若干埃っぽかった店内はなんとなく清潔で明るい雰囲気になり、空気もさわやかだ。

私はそんな店の入口付近でぼつねんと夕陽を眺めていた。リーナは一人で夕食の準備をしている。私も夕食の準備を手伝うと言った

のだが、包丁を握った途端に台所から追い出されてしまった。なんでも「包丁を両手で握る人は初めて見ました！」なのだそう。包丁も剣などと一緒で両手で握るものなんじゃないのだろうか？ 私は包丁を使ったことが一度もないのでよくわからないが。

そうしてともかく一人で夕陽を眺めていた私。そんな私は、ふとウィンドウを展開した。そして、大きく肩を落とす。

「さて、このアイテムの山をどう使おうかしら……」

片付けの途中にリーナとした話によると、この世界にはポーションなどの通常アイテムはあっても課金アイテムの類は無いらしい。しかも非常にまれにそれに類する効果を持つ物が見つかる、それらはすべて莫大な金額で取引されるのだそう。だから、私の持っているアイテムはすさまじい価値を持つわけなのだが……。

「少しぐらいなら売ったりしてもいいけど、あんまり売るのも経済崩壊させそうで怖いわね……。だけどこんなにたくさんは使いきれないだろうし、どうしたものか……」

困ったようにふらつく私の視界。その中には、所持上限がないことを良いことに買い足すのが面倒だからと数万個単位で大人買いしたアイテムの山が映っていた。

「うーん……」

「おいしくできましたー！ スイさん、ご飯ですよ！」

後ろから響いてきた甲高いリーナの声。それに私は気持ちを切り替えた。人間、何よりも切り替えが大事だ。

「はい、今行くわ」

そう答えた私は、居間へと走っていった。するとすでに、居間のテーブルにはおいしそうな夕食が並べられている。今日はシチューと温野菜のサラダのようだ。私はすぐさま席に着くと、挨拶もそこそこに食事をとる。うん、おいしい。シチューの牛乳を基調としたまろやかな味わいと、芳醇な野菜の味わいがなんとも優しい。くわえて温野菜に入っている紫玉ねぎの苦みとシチューの甘みの相性は抜群で、一緒に食べると絶妙な味わいだ。

「おいしいわね、本当にあなたの料理は最高だと思う」

「嫌ですよ、そんな」

顔を赤らめて恥ずかしそうに笑うリーナ。それにつられて、私もにっこりと笑う。なんとも幸せで、満ち足りた気分になった。これが日常の幸せというやつなのだろうか。なんだかずいぶん久しぶりで、懐かしい感覚だ。こういうのも、たまには悪くない。

こうして割合、平和な一日を過ごした私。だが、勝負は明日からだ。リーナの話によると明日はなんと、リーナの薬を使う道具屋との間で重要な商談があるらしいのだから。

第八話 魔神さまと取引

ガタガタと揺れる景色、揺れる身体。私は石畳の上を軽快に走る馬車の中にいた。今日は大事な商談の日。私とリーナは取引先の商會がよこした馬車に乗り、相手の屋敷へと向かっていた。

今日の取引相手は、タイラーといふかなりの豪商。薬や生活雑貨、さらには食料品まで取り扱うタイラー商店という店をいくつも街に展開しているらしい。かなりのやり手で知られる商人で、近年ギルドにも影響力を発揮しているのだとか。嘘か本当かはよくわからないが、ギルドマスターの座を狙っているという話まである。

何故か本が日本語で書かれていたのであらかじめ相手の情報を仕入れておいたが、正直かなりやりにくそうな人物だ。私は先がちよつと思いやられて、大きく息を漏らす。その一方で、隣のリーナは能天気な顔をしていた。まったく、平和なものだ。こっちは今日の取引に備えて、昨日は徹夜でいろいろと勉強したというのに。

「今日の取引は難しそうだね。気合いを入れましょう」

「そうですね？ 普通に仕入れの話をするだけなので、そこまで難しいとは思いませんけど……」

「普通の話をしよつと思わないから悩んでるの。普通にやってたら利益を三十パーセントも上げるなんて不可能だからね」

「……あんまり変なことをしないでくださいよ。タイラーさんから取引を打ち切られたら、うちは困るんですから」

リーナはムツとたしなめるような顔をした。私はそれにふふふと笑って答える。リーナはイマイチ納得がいかないような顔をしていたが、とりあえず表情を元に戻した。

こうしていると、馬車は通りを抜けてある屋敷の前に来た。私の背丈の二倍はありそうな高い塀と、馬車ごと出入りできるような巨大な門がどっしりと聳えている。門の隙間からは青々とした芝生と白亜の建物が見えた。西欧風の、いかにも豪奢で洒脱な造りをした屋敷だと私は思った。

私たちは馬車の御者兼案内人に連れられて、屋敷の中へと入っていった。飴色の分厚い玄関扉を抜けると、そこには贅を凝らしたあらゆる種異様なまでの空間が広がっていた。毛足の長い艶やかな紅絨毯に、天井からつりさげられたシャンデリア。宝石をこぼれんばかりにあしらったそれは、はたから見ていて落ちるのが心配なほどだ。さらに壁には精緻な細工が無数に施されていて、触れるのが怖い。

屋敷の豪華さで自分の財力を見せつけ、相手を威圧する。独裁国家などが国際行事を派手にやって国威発揚をするのと同じ理屈だ。なるほど、タイラーという人物はうわさ通りのやり手らしい。私は認識を改めると、しっかりと気を入れ直す。

その時、奥の扉が開いた。重々しく開かれた扉の向こうから、背の高い壮年の男が現れる。柔和だが底の見えない笑みを浮かべている男。彼は私たちの方へと近づいてくると、気易い様子で声をかけてきた。

「いらつしゃい、リーナさん。おや、こちらのお嬢さんはどなたかな？」

「新しくリーナ商会の外部顧問になりましたスイです。よろしく」

「ほう、外部顧問ですか。タイラー商会のタイラーです。これからよろしく頼みますぞ」

タイラーはほんのわずかに眉をゆがませたものの、すぐ親しげな態度で手を差し出してきた。まるで、遠方に住んでいる娘にでもあったかのような態度だ。まったく嫌みというものがない。私はそんな彼の手を、愛想笑いを浮かべながら握った。

「さてと、挨拶も済みましたし早速奥の部屋へと行きましょうか。商談はそちらで」

タイラーにエスコートされながら、私たちは奥の部屋へとたどり着いた。派手な玄関とは打って変わり、落ち着いた日当たりのよい部屋だ。家具など調度品のセンスも良く、クラシカルな雰囲気がある。やはり、玄関のあれはパフォーマンス的意味合いが強いようだ。

「ささ、どうぞお座りになってください。すぐにメイドに茶を用意させますからな」

タイラーは私たちを先にソファアに座らせると、パンパンと手を叩いた。すぐさまメイドが現れて、テーブルに紅茶を注いでいく。その立ち振る舞いは洗練されていて、老舗ホテルの従業員のようだった。タイラー自身の態度といい、彼は客に不快感を与えないようにするのが非常に上手らしい。

私はメイドが立ち去ると同時に紅茶を一口すすった。そして適当な感想を述べると、そのままタイラーと他愛もない世間話をする。だがしばらくして、退屈そうな顔になり始めたリーナがおもむろに

口を開いた。

「あのタイラーさん。そろそろお仕事の話をしても良いですか？」

「おお、そうでしたな。すっかり忘れていましたぞ。うちとしてはそろそろ冷えてきたので、風邪薬を二百ほど仕入れたいのですが…去年と同じ相場でいかがですか？」

「わかりました、それで……」

「ちょっと、待っていただけますか？」

二人の話を遮った私に、容赦ない視線が注がれた。二人とも、驚いたような顔をしている。とくにリーナは、どうしてそんなことをするんだとも言いたそうな顔だ。眉がへの字になってしまっている。私はすり寄ってくる彼女を制すると、タイラーの方へと向きなおった。そして、出来るだけ強い口調で言う。

「去年の相場の二倍でいかがでしょう？」

「ずいぶんと面白いジョークをおっしゃる。コメディアンの才能があるとおもいますぞ」

「まじめな話です」

「……なにか、お考えでもあるのですかな？」

タイラーはここにきて初めて怪訝な顔をした。抜け目のない、商人の顔だ。先ほどまでの柔和な態度はすっかりとなりをひそめ、代わりに威圧感が前面に押し出されている。

だが、私はそんな彼など全く怖くない。こういう連中などいくらでも見てきた。むしろ、先ほどまでの柔和な態度の方が底が見えない分厄介なほどだ。冷静な気分になった私は、怯えたような顔になっているリーナの肩に手をかけると、タイラーに向かって笑いかける。

「これから言うことはあくまで独り言です。あなたは近くにいるから聞こえただけ。ということだ」

「……」

タイラーは黙って指で丸印を作った。了承の合図だ。

「なんでも、この街は領主さまの方針で寄付はする方もされる方も税金がかからないのだとか。むしろ、寄付した方は寄付した分だけ税金がお安くなるそうですね。そこで私も、誰かに寄付をしたいと考えているのですが……。誰がよいでしょうか。もしうちの店の商品を高く買い取ってくださる方がいれば『謝礼』として、商品を売った儲けの半分くらいを『個人宛』に寄付してもいいんですけど……」

私はニツとタイラーに視線を送った。するとタイラーは豪快に笑い始める。どうやらこちらの言いたいことを正確に察したらしい。まったく、素晴らしく頭の切れる男だ。

「なるほど、名目上の利益を減らして節税しようというのか。だが、それだとそちらには利益がないな。何が目的だ」

「そうですね、出来ればいつもの三割増しほど薬を買い取っていた

「できれば」

「よかろう、三割と言わずに五割増しの三百個買い取るんじゃないか」

「ありがとうございます。今後ともご贖員に」

タイラーは私に向かって、満足げな表情で手を差し出してくる。私はそれに応じて、固く彼の手を握りしめた。日本でやったら確実にアウトだが、まあ異世界だから大丈夫だろう……。そんな考えもあってか、自然と私の顔からは笑みがこぼれていた。もっとも、私のわきにいるリーナは何が起きたのかすらイマイチ理解ができていないようだったが。

第九話 魔神さまと社長

「スイさん、あの取引は結局なんだったんですか？ 私には良くわからなかつたんですけど……」

タイラーの屋敷から家に帰ってきてすぐ。リーナがどこか申し訳なさそうな顔をして、私にそう尋ねてきた。私は取引が終わってほつとしたのもあって、気分良く笑う。

「あの取引は結局、二人で仲良く税金を節約しましょうってことよ」「ほえ？ どういうことですか？」

ふにゅつと眉をゆがませたリーナ。やわらかそうな頬に少しえくぼができていて、なんとも見えていて微笑ましい。私はふつと微笑むと、教師よろしく近くの壁をペンでたたいた。

「まず、相場の二倍で薬を買ったタイラーさんのお店はどうなると思っ？」

「たぶん赤字になると思います」

「そう、赤字になるわ。そうするとタイラーさんは何かを払わなくても良くなるのだけど……何かわかるかしら？」

「うーん、なんでしょう……。あッ、もしかして税金ですか？」

「その通りよ、タイラーさんは税金を払わなくてよくなるわ」

「でも、そもそも赤字なんだからタイラーさんに儲けなんてないんじゃない……」

リーナは不満そうな顔をした。この子、商人の割に察しが悪い。私の頬がほんの少し膨らんだ。

「問題ないわ。相場を上回った分についてはあとから私がタイラーさんに寄付することになっているんだもの。ほら、そんなようなことを言っていたでしょう？」

「そういえば……。なるほど、タイラーさんが払うはずだった税金が儲かるってことですか。あれ、でもそうするとうちが二倍税金を払わなくちゃいけなくなりませんか？」

リーナの顔に疑問が浮かんだ。おバカではないのでそれなりには頭が働くようだ。私はニツと目元をゆがめると、彼女に微笑みかける。

「うちの売り上げが名目上だけでも二倍になったから、それにかかる税金も二倍になるんじゃないかってことね。でもそれについては大丈夫よ。タイラーさんへの寄付金を損益として計上できるから、通算すればいいの」

リーナの顔がみるみる驚愕に歪んでいく。もともと大きな目がどんどん広がって、完全に見開かれた。いっそ、白眼でも向いてしまいたいそうなのだ。彼女はそんな蒼白の顔になると、勢いよく私に詰め寄ってくる。

「そ、それって大丈夫なんですか！ 完全に制度を悪用して脱税してるじゃないですか！」

「大丈夫よ、バレやしないわ。この街の領主は言っちゃ悪いけれど、あまり頭がよくない人みたいだから」

この街を統治しているキース・バルディアという人間は、人はいよいよなのだがあまり頭がよくないようであった。今回私が利用した寄付金非課税制度も、彼がただ単純に「寄付はいいことじゃないか」といつて始めたらしい。しかも、本来ならそれをとがめるべき側近たちは寄付金で利益を得る聖堂関係者ばかりのため、今までこの制度は放置されていたようだ。まったく、白粉を顔に塗りまくったどこぞの馬鹿殿みたいである。

「あー、確かにバルディア様は……。でも、よくそんなこと知ってましたね。この街にははじめてきたんでしょう?」

「まあね、でもこれがあるから」

私は懐から六法全書のような分厚い本やら雑誌やらを何冊も取り出した。いずれも、リーナの家置いてあったものだ。リーナに読まれた形跡こそあまりないが、リーナの家には商売をやっている関係上、そういう本が大量に保管されていたのだ。

私の前にデンと積まれた本。その数なんと六冊。その山のような様子を見るなり、リーナの顔が固まった。彼女はそのまま、ぎくしやくとしたぎこちない動きでこちらに振り向く。

「もしかして……。これを全部覚えたんですか!」

「ええ、昨日のうちになんとか。覚えるのに骨が折れたわ」

「いや、苦労したとかそういう問題じゃなくて……。普通の人はこんなに覚えられませんし、そもそも一晩でこんな分厚い本を六冊も読めたこと自体が驚きですよ！」

心底驚いたのか、リーナはひっくり返りそうになった。地球でも、私がこういうことを言うたびにみんな驚いたものだが……。どうしてだろうか？ 別に一度見た文字を忘れないとか、一分一万文字ペーシで本が読めるとかは普通だと思っただが。雑誌の広告に掲載されている体験談とかを見る限りだと、似たようなことができる人は世の中にたくさんいるらしいしね。

私がそう思っただけで改めてリーナの方を向くと、リーナは虚脱状態になっていた。仕方ないので、ぼかんとしている彼女を華麗にスルーすると私は店の帳簿をつけ始める。まだ、私の役目は終わったわけではないのだ。

タイラーとの取引からはやくもひと月近くの時が流れた。今日はいよいよ、今月の利益が明らかになる日である。この利益が前月と比較して三割以上伸びていれば、目標達成だ。私は晴れて暖簾分けを認められ、いっばしの商人となれる。そうなれば、自動的に騎士団も結成できる予定だ。

そんな私の目の前で帳簿を合わせていくリーナ。虫眼鏡を片手にしたその表情は真剣そのもの。ペンがさらさらと紙の上を滑る。私は次々と数字を書き込んでいくそれを、固唾をのんで見守っていた。

そうして帳簿への書き込みはすぐに終わった。続いて、リーナは帳簿に書かれている数字を読み上げていく。朗々とした声。私の背筋から自然と汗が落ちる。タイラーとの取引とはまた違った緊張がここにはあった。

「利益。前月18900エル。今月28100エル。……やりました！ 三十パーセント上昇達成です！」

「やったわね、これで暖簾分けの件も認めてもらえるかしら？」

「いいえ、それは駄目です」

一息ついた私に、何故かリーナは笑顔でそんなことを言った。まったく、曇りのない笑顔で。おかしい、条件はきっちり守ったはずだ。私は顔を朱に染めながら、リーナの肩へと手をかけようとする。もうこうなったらやむをえまい、実力行使だ。しかしその時。

「スイさんには、この商会の社長をぜひともやってもらいたいです！ だから、暖簾分けはできません！」

リーナの力強い声が、私の耳に響いた。

第十話 魔神さまの旅立ち

「あなた、本気で言っているの？」

私はたしなめるような口調で言った。だが、リーナの頭は静かに縦に振られる。透き通った涙みのない瞳。まったく表情に曇りがなかった。

「私は本気です！ スイさんのことを見てたら、私なんかじゃこの商会の主は務まらないと感じたんです。スイさんこそこのリーナ商会の主にふさわしいですよ」

「そうはいつでも、ここはあなたの御先祖が始めた商会なんですよ？ やはりあなたが継ぐべきよ」

私がそう言った刹那、リーナの表情が露骨に曇った。彼女は沈痛な表情で顔をうつむける。やがてその重い口がうつすらと開かれると、ぽつりぽつりと言葉が漏れてきた。

「……もともと、私はこの商会を継ぐつもりはなかったんです。本当は王都で修行して、料理人になるのが夢だったんです。でも、父さんと母さんが揃って私の小さいころに死んでしまって……」

「そう、仕方なく商会を継いだってわけね？」

「はい……。そのときまだ生きていたおばあちゃんが言ったんです。『百年続いたこのお店も終わりがかねえ』って。その悲しそうな顔を見てたら、とても継がないなんて言い出せなくて……」

そうつぶやくリーナの表情は、昔の私に何となく似ていた。私はそんな彼女に昔の自分を重ね合わせる。

私の家はもともと会社を経営していた。同族経営の、それほど大きくない会社。安定してはいたが、成長も変化もさほど望めない業種の会社。私はそんなつまらない会社の跡取り娘として育てられてきた。幼いころから神童と呼ばれ、学問では一番を譲ったことになかった私は両親が将来を過剰に期待するには十分すぎたようだ。

そんな私に約束されていたのは退屈な将来。田舎のさほど大きくない会社を継ぎ、変化も何もなくただ無為に時を過ごす。私自身はそれが何よりも嫌だった。虫唾が走るほど嫌だった。ゆえに一層勉強に励み、米国への留学という形で運命から逃げようとした。

結局のところ、両親は私が大学を飛び級で卒業したのとはほぼ同時に死亡してしまい会社は親類が継ぐことになった。両親が死んだのは確かにつらかったが、同時に妙な解放感をもったのも事実だ。おそらく、今のリーナはあの時の私とおなじ状況なのだろう。親類が会社を継いだように、私が商店主になることを期待しているのだ。

「……………私は各地を回って商売をしようかと思っているの。飛行船を買って、それに商品をいっぱい詰め込んでね。だから、もし私を社長にしたりしたら商会自体は大丈夫でもこのお店はなくなるわよ」

この世界には飛行船というものがある。ヘリウムや水素の代わりに、魔法の力で空を飛ぶ飛行船だ。エルガイアでは転移玉があった上にプレイヤーは購入できなかったので存在を忘れかけてすらいだが、考えてみればこれほど都合のいい存在はない。どんなところでも快適に旅できるうえに、仲間や商品をいっぱい載せられる。まさ

に私の目的にぴったりの乗り物なのだ。

漂い始めた静寂。さすがのリーナも店がなくなると聞くと複雑そうな表情をした。あまり好きでなくともやはり、先祖代々この場所ですべて続けた店にこだわりはあるらしい。だがしかし。

「……構いません。やる気のない私が小さな商売を続けるより、スイさんが世界で大きな商売を始める方が有意義です。きっと初代も本望だと思います」

「本当に、後悔はないのね？」

「大丈夫です、ありません」

リーナは真剣だった。その目に迷いはない。私はそれを見ると、フウっとため息をついた。

「わかったわ。その代わりに、ついてくるんだったら毎日おいしい」
「飯をつくってね？」

「はいッ！ もちろんです！」

しづしづながら私がリーナ商会の社長になって二週間目の朝。行商を始めるのに必要なさまざまな手続きを、私とリーナは今日になってようやく終わらせた。百年以上も続いた店をたたくで新たに商

売を始めるといふのは大変で、これだけの時間がかかってしまったのだ。とくに行商を始めるために必要な通行手形を取得する手続きが恐ろしく複雑で、二人がかりで電話帳のような書類の山を片づけたのは記憶に新しい。

ともかくこうして準備を終わらせた私たちは、飛行船の発着場にいた。視界を占領する、紅い巨体。眩しい朝日の中に優美な曲線を描くそれはさながら空に浮かぶ鯨のよう。それほどまでに巨大で存在感のある飛行船が、私たちの前には聳えていた。

「これが、私たちの飛行船……」

「そう、私たちのよ。アインヘリアルって名付けてあるわ」

「へえ、アインヘリアルって言うんですか……」

うつとりとした表情でアインヘリアル号を見つめるリーナ。私はそんな彼女に少々自慢げな顔をする。かなり高くついたが、やはり良い船を買ってよかった。安物買いの銭失いというが、まさにその通りだと思う。高いものには高いだけの理由というものがあるのだ。もともと、アインヘリアル号は大きさと性能の割には安い中古の改装船であるが。

「この船の凄いところは見た目だけじゃないわ。これだけ大きな船なんだけど、素晴らしく簡単な操作で動かせるの。おかげさまで、人を雇わなくて済んだわ」

「そうなんですか、じゃあ船の上では二人つきりなんですね」

「まあ、各地で仲間を増やしていくからすぐに二人じゃなくなる予

定よ。今は言えないけど、私には目標があるもの」

私は東から昇ってくる朝日の方を見た。もうまもなく、この朝日も見られなくなるかもしれない。魔王が復活してしまえば、世界は闇に閉ざされるのだ。それまでに何とか魔王に対抗できる戦力を確保しなければならぬ。正確な日時はわからないが、もう時間はなかった。

「さてと、そろそろ行きましようか。忘れ物はない？」

「もちろん、大丈夫ですよ！」

背中に背負った特大のリュックをポンポンと叩くりーナ。私はそれを見てクスツと笑う。だがすぐに咳払いをして気を取り直すと、船の進行方向を見て宣言した。

「じゃあいよいよ出発ね。この無限大の世界へ！」

見渡す限りに広がる空と大地。そして、その中に今まさにうごめいているであろう巨悪。そう、私の行く先には仮想ではない本物の世界がどこまでも広がっているのだ。

第十話 魔神さまの旅立ち（後書き）

ファンタジーといえば飛行船……というわけで飛行船の登場です。馬車で地道に行商していくのもいいですが、やっぱり空を飛ぶ浪漫に勝てませんでした。

第十一話 魔神さまと修行

眼下に流れる雲海。純白の絹のような雲がたなびき、薄い層を造っている。その上に広がる空は宇宙が見えそうなほど透明。見つめていると、スウツと吸い込まれてしまいそうなほどだ。私はそんな空と雲を横目にしながら、飛行船の甲板で一人黙々と剣を振るっていた。

アインヘリアル号の上部は広い甲板となっている。もともとは天候を観測したり、空を飛ぶ魔物への警戒をするためのスペースだ。だがそこを私は改装してもらって、修練用のスペースにしていた。いい加減そろそろ、私自身も戦乙女の熟練度を高めスキルを習得しなければならぬのだ。

エルガイアはレベルもちろんそうだが、隠しパラメータである熟練度が極めて重要なゲームだ。この熟練度を上げることにより動きがより滑らかになったり、スキルを習得したりできる。その他の能力が同じであっても熟練度次第で動きや技に天と地ほどの差が出るので、対人戦では最も重視されるパラメータだ。

だが、熟練度というのは隠しパラメータ。しかもバトル漫画のファンだという開発者の影響か「修行」をしないと上がらないようになっていて。具体的に言うと、剣を振るっていけばだんだんと剣を振るうのが上手くなり、槍を振るっていけばやりの扱いが上手くなるといった具合だ。だが数値は一切表示されないの、どれくらい上がったのかは実際に戦って確かめるしかない。

さらに言うと、修行の内容によって習得するスキルにも違いが出てくる。嘘かほんとは知らないが、某野菜人のマネをずっと続け

ていたら手のひらからビームが出せるようになったとかいう話まである。まあ、おそらくただの魔法攻撃であって月を破壊したりはできないのだろうけど。

「せいッ！ たあッ！」

気迫とともに宙を斬る刃。凍てつく空気がしなり、響く無機音。足もとに張られた薄い鉄板が耳障りな音を響かせる。私の額からは汗が落ち、たちまち凍りついてしまった。

空の上は酸素が薄く極寒だ。現在アインヘリアル号の甲板はマイナス二十度、酸素濃度が地上の八十パーセントになっている。エルガイアにおいて修行は過酷な環境でやればやるほど熟練度が上がるので、まさに修行には絶好の環境といえた。

そんな極限環境の中、私は防寒具も付けずに修行をしていた。それどころか両手両足にそれぞれ重さが百キロあるヒイロカネのわかを装備している。そのため修行の効果は高いものの、身体にかかる負荷は半端ではない。エルガイアでは現実に比べてかなり軽減されているものの、疲労という概念がある。なので私は十分に一度のペースで休憩をとっては課金アイテムの特級回復薬をがぶ飲みしていた。

そうしてまた一息ついていると、甲板の奥の方から足音がしてきた。私が振り返ると、ギシリと音がして中と外をつなぐ扉が開かれる。その分厚い扉の向こうには、防寒具でモコモコになったリーナが立っていた。

「スイさん、朝ごはんですよ。って、そんな恰好でそこにいたんですか!？」

「ええ、これが一番修行になるから」

「はあ……。さすが守護騎士さんというかなんというか……」

あきれ顔になるリーナ。彼女はくるりと背を向けると、そのままスタスタと階下へ降りていく。私は重い腰を上げると、そんな彼女の背中を追いかけていったのだった。

その後、二人で食べた朝食はつつがなく終わった。飛行船の上でもリーナの食事は相変わらずおいしい。さすがに料理人を目指していたというだけのことはある。私はその美食の余韻に浸りながら、温かい紅茶をすすった。下がった視線が、テーブルの上に広げた大陸地図へと向く。そこにはすでに、飛行船の位置を示すマーカーが置かれていた。

「現在位置がこのあたりだから、目的地のサイガ鉱山まではまだだいぶあるけど……。そろそろ補給が必要ね」

「このあたりだとどうでしょう、エルトリアがいいでしょうか」

「うーん……。エルトリアか。聞いたことのない街ね……」

私たちはとりあえず、当面の目的地としてサイガ鉱山という場所を定めていた。サイガ鉱山というのは大陸最大のミスリル鉱山である。兵器に使われるミスリルを、魔王来襲後の値上がりを見越して

今のうちに買い占めておこうというのだ。

ただし、サイガ鉱山があるのは大陸の北の果て。なので大陸の南方に位置するラクーナからそこへ行くまでにはたくさんの時間が必要であるし、たくさんの場所に経由しなければならぬ。そして出来ることならば、サイガへ着くまでに仲間を集めてしまっておきたかった。魔王が来襲すると、優秀な守護騎士は国の軍隊に組み込まれてしまうからだ。さらにできることならば、経由地で商売をして手持ちの資金を増やしてもおきたい。飛行船を買ったせいで、私たちの懐は少々さびしかった。

そんなわけで経由地の選択には慎重さが必要だ。私は大陸の都市の情報が載った本を引っ張り出してみると、エルトリアという都市について調べてみる。少なくとも、エルトリアはゲームには登場しない街だった。VRといえどもゲームなので、この広い世界のすべてが登場しているわけではない。

エルトリアについて書かれたページを読んでもみると、エルトリアは割合大きな都市であるようだった。大きな闘技場があり、そこを中心としてかなり栄えているようだ。ただし、全体として荒れた気風が漂っていて治安は悪いらしい。街のあちこちに堂々と娼館やら賭博場やらが立っているようである。

しかし、闘技場があるということは優秀な戦士がいる可能性が高いということだ。私はエルトリアに寄った場合のプラスとマイナスについてしばらく考えると、リーナに告げる。

「……経由地として悪くはないかしら。そうね、ここへ寄ることにしましょう。進路を北東方向に変更して」

「はいッ、わかりました」

私が本をぱたりと閉じると同時に、リーナはピシッと敬礼をした。彼女はバタバタと足音を響かせながら、操舵室の方へと走っていく。こうして私たちのインヘリアル号は一路、闘技場の街エルトリアへと進路をとったのだった。

第十二話 魔神さまと砂漠の都

吹きあがる熱風。私の視界に広がるのは一面の砂。エルガイア大陸の中央から南部にかけては、広大な砂漠が広がっている。アインヘリアル号は、そんな砂漠の真つただ中を飛んでいた。しかもその高度はかなり低い。私たちの目指すエルトリアはこの砂漠の真ん中にあるのだ。

「だいぶ地上に近づいてきたわね。そろそろかしら？」

「ええ、地図で見る限りあと数分のところにエルトリアはあるはずなのですが……。なかなか見当たりませんね」

双眼鏡を目に押しあてながら、リーナは顔をゆがめた。私は若干不安そうな顔をした彼女から双眼鏡を受け取ると、丁寧にあたりを見回してみる。すると、遠くの方に僅かに煌めく何かがあった。まるで砂漠の中にガラスでもばらまいたような感じだ。

「あれは湖？」

「えッ、こんな砂漠に湖があるんですか？」

「ちょっと分からないけど、ほら見てみて」

双眼鏡を押しつけるようにリーナに手渡した。それを受け取ったリーナはすぐさま私の指差した方を見る。するとたちまち、その顔が驚きに染まっていった。

「あれは湖じゃないです、街ですよ！ 白い壁がキラキラ光ってる

んです！」

「あら、ほんとに?」

「間違いありません、立ち並ぶ家とかその向こうにある大きな建物まで見えます。そろそろ肉眼でも見えてくるはずですよ！」

どこか急かすように言うリーナ。私は目の前にある手すりに身をよりかけると、さきほどの場所へと目を凝らした。すると、ミニチュアのような街の姿が目飛び込んでくる。立ち並ぶ丸っこい家々、その奥に聳える円形の何か。形からすると、おそらく闘技場か。どうやらこの街はエルトリアとみて間違いのないようだ。

「見えたわ。あれは間違いなくエルトリアね。リーナ、着陸準備よ」

「はいッ」

リーナはいつものように自衛隊式の綺麗な敬礼を決めると、操舵室へと消えていった。その背中を見送りながら、私は砂漠の街エルトリアでどんな商売をしようかと頭をひねるのだった。

「すごい賑わいですねえ、これが本場のバザールですか?」

「ええ、この砂漠を通る隊商たちはみんなここを中継地点としているからね。砂漠を通るたくさんの方商人たちが集まって、このバザー

ルを形成しているの」

「詳しいんですね」

「まあね、大抵のことは本に載っているわ」

飛行場を街外れの停泊所に止めた私たちは、さっそくエルトリアの街を探索していた。商売をするには、なによりもまず下調べが必要だ。私とリーナはそれぞれメモ帳と羽ペンを片手に、街のあちこちの店を調べて回っている。

くしくも、この時期は闘技場で何か大きなイベントがあるようだった。おかげでもともと狭苦しい印象の街は観光客でいっぱいだ。さらに観光客たちの財布を狙った出店も盛んに出されていて、店で通りが塞がりかけているような場所まである。とにかく砂漠の熱気と人の熱気がまじりあって、なんとも強烈なオーラを感じさせる雰囲気だった。

その圧倒的な雰囲気気押しされながらも店を調べていくと、意外な事実がわかった。砂漠の真ん中にある割にエルトリアは水に不自由していないようなのである。あちこちの店で冷たいジュースのようなものが売られているのだ。しかもかなりの安価で。

これはいかにもまずい。私が用意していた商品は空の上でたつぷりと冷やしたラクーナの綺麗な水と氷だ。大陸中央部に砂漠が広がっているのはわかっていたので、砂漠の街のどこかでこれら売りさばこうかと思っていたのだが……。これは完全に想定外だ。焦った私は、リーナを通りに待たせると近くにあったジュース屋さんを尋ねてみる。

「すみません、ちょっと聞きたいことがあるんですが」

「おや、なんだいお嬢ちゃん？」

気さくな感じのするおばさんが、作業をする手をとめて私の方に振り返った。良かった、この人ならたぶん疑問に答えてくれそうである。もっとも、怖そうな感じがする人でも私は全く平気だが。

「この街って砂漠の真ん中にあるけどずいぶんたくさんジュース屋さんがあるわね。どうしてなの？」

「そりゃあ、暑いからさ。暑いと誰だって水が飲みたくなるだろう？」

「そうじゃなくて、冷たい水を砂漠の真ん中でどうやって用意しているのかを聞きたいの」

おばさんは僅かに首をひねった。そしてポンッと手を叩くという。

「ああ、そういうことかい。ごめんね、最近ちょっとボケてきちゃってさ。すぐにはわからなかったよ。このあたりは地下水が豊富でね。ちょいと井戸を掘ればいくらでも冷たくておいしい水が出てくるのさ」

なるほど、地下水か。納得した私はウィンドウの中からおばさんにばれないように銅貨を取り出した。それを情報料代わりにカウンターの上へとおくと、すぐさまリーナのいる方へと戻ろうとする。ところが。

「あれ、リーナ………？」

ほんの数秒目を離したただけだったのに、リーナの姿が消えていた。はて、どこへ行ったのか。私は呆れたような顔を見ると、フラフラとどこかへ歩いて行ってしまったであろう彼女の姿を捜しに出かける。一見楽しげに見えても基本は物騒な街だ。早く見つけないとぼけぼけしているリーナのことだ、さらわれてしまつかもしれない。

そう思って街中を捜してみたものの、リーナの姿は影も形もなかった。もしかして、すでにどこかへさらわれてしまったのだろうか。しかし、白昼の大通りでも周りの人間に気付かれずに人攫いをするなど可能なものか。いくらこの街の住人が荒事に慣れているといっても、気がつけばちょっとした騒ぎにはなるはずだ。

さてどうしたものか……。なかなか良い対応策は思い付かない。私は大きなため息をつく、道の端でへたりこんだ。もう時刻は夕方近く。もうそろそろ時間がなかった。私の頭の中を焦りが覆い尽くしていく。

「万事休す……かしら？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6596w/>

VRMMOに一億課金しましたけど、なにか（キリ

2011年10月4日22時35分発行